

# FJ1600前へ

水野昇太選手を応援して下さるスポンサーを募集しています。

お問い合わせ先

PEEK-A-BOD RACING

〒604 京都市中京区竹屋町東洞院西入三本木5-464-1

TEL (075) 255-6202

DELECTION SHUHEI NISHIZAKI  
TEXT by AKIHIRO KOMIYAMA  
PHOTO by SADAHO NAITO



どんな世界でも頂点にいる者は、必ずそのことを予感させるエピソードをもっている。たとえば、野球の大投手たちの多くは、幼い頃に大人を驚かせる打球を打っているというし、鈴木亜久里を始め、頂点を極めたレーサーは、まだクルマの構造もわからない少年の頃から大人並の運転ができたという。つまり頂点に立つ者は、将来を予感させる片鱗を必ず幼い頃に見せている。

水野昇太にも、子供の頃これに近い驚くべきエピソードがある。だが、彼の場合はこういったエピソードとは、ちよっと違っている。

彼は幼少の頃、プリキでできた一台のスポーツカーがお気に入りだった。普通の子供ならば、そのオモチャのクルマを走らせることに興味を示すのだが、彼の場合はそうではなかった。

このようにレースでの彼のすさまじい勝ちへの執念は、剣道によって培われたものだろう。だが、執念だけでレースを勝つには限界がある。レースを常に勝ち続けるには、自分への勝ちを呼び込む冷静な判断が必要なのだ。

「あるとき、昇太の遊んでいる姿を見てたら、さっきまでちゃんとした姿をしていたオモチャのクルマがバラバラになってたんです。まあ、子供のやることです。しょうがないと気にも止めなかったんですけど、三十分ほどですかね、目を離していたのは。再び昇太のほうを見たら、なんとクルマがちゃんと元の姿になってたんです。驚きましたね、誰か直したのかと。まだ物心のついてないくらい、昇太が幼な

彼は現在まで好成绩を挙げている。これは、もちろんこの冷静な判断を彼が持ちえていたためである。「冷静な判断なんていわれても、僕はまだまだです。熱くなり過ぎることもまだまだ多いし。だけど、確かにしんどいと感じた時こそ、僕は強引に行かす頭を使いますね。しんどいとこそ、勝つために頭を使え。これは高校のポーター部のときに教わった言葉ですけど、今でもレース中には必ず、この言葉が脳裏に浮かぶんです。」

「確かにクルマをいじっているのは、幼い頃から好きだったと思いますよ。僕自身の記憶の中には明確に無いんですけど。小学生くらいのときは、クルマ

マを走らすことよりも、中身がどうなってるかというほうに、興味をもっていましたね。だけど、その頃に本当に興味を持っていたのは、クルマよりも剣道でしたよ。けっこう真剣に。」

「彼はいつも『勝負が好きだ』という。この勝負とは引き分けのない、勝つか負けるかのみを真剣勝負のことだ。現在レーサーとして生きる彼の根底にはこの精神がある。このレーサーにとって大切な精神こそ、この頃の剣道によって養われたものだ、彼はいう。

「剣道というのは、1対1です。ものでしょう。だから必然的にどちらかが勝つて、どちらかが負ける。どうせやるなら勝つたほうが気持ちいい。単純かもしれませんが、今でもあるそういった感覚は、小中学生のときに剣道で体染みついたものですね。」

このようにレースでの彼のすさまじい勝ちへの執念は、剣道によって培われたものだろう。だが、執念だけでレースを勝つには限界がある。レースを常に勝ち続けるには、自分への勝ちを呼び込む冷静な判断が必要なのだ。

彼は現在まで好成绩を挙げている。これは、もちろんこの冷静な判断を彼が持ちえていたためである。「冷静な判断なんていわれても、僕はまだまだです。熱くなり過ぎることもまだまだ多いし。だけど、確かにしんどいと感じた時こそ、僕は強引に行かす頭を使いますね。しんどいとこそ、勝つために頭を使え。これは高校のポーター部のときに教わった言葉ですけど、今でもレース中には必ず、この言葉が脳裏に浮かぶんです。」

彼は高校のポーター部のとき、頭を使えと常々いわれていたという。早くオールを漕ぎたかったら、体力よりも

頭を使え。人よりも一秒遅かったらそれを運と嘆く前に、どうしたらその一秒を縮められるか頭を使え。こういったポーター部のときに言われた言葉が、現在のレーサーとしての彼の冷静な判断をつくり出しているのである。

また、彼はこのポーター部でかけがえないものを学んでいる。「当たり前なことだけど、ポーターは水の上だから逃げ場がないですよ。逃げ場がないところで、同じポーター仲間と一緒にポーターって、自分一人がいくら焦ってオールを漕いでも前になかなか進まないですよ。前に早く進めばいい。仲間と息がピッタリと合っていないと、仲間と息が合っていないと進められない。仲間とのチームワークがなければ勝てないんです。」

彼はレースの前に必ず、多をはじめ、メカニックともよくコミュニケーションをとる。これは自分一人でレースをしていない彼の自覚であり、カーレーサーもポーターと同じようにチームワークが勝利を生むという、彼の考えの表れである。よく一般には優れたレーサーの才能だけあれば、レースに勝てると思われがちだが、チームワークが一番勝敗を左右する。彼は既にそのことをポーターで学んでいたのである。

そしてこのポーター部での経験が意外にも彼をクルマの世界へ向けてくれたのである。「僕はポーター部に一年遅れて入部したんです。だから皆とのギャップを取り返そうとして、しゃにむに体を動かそうとしたんです。そうしたら当時の恩師が『勝つためには努力が必要だ。だが努力とは体を鍛えるだけのことではない。』とやってポーターに関するすべての資料をくれたんです。つまり、早くなるには、その方法や効率のいいシス

テムを知ること、あるいは考え出すことも、また努力だということをごとき教わりましたね。」

彼は高校のポーター部を引退したとき、初めて将来のことを考えた。「オレは将来何になるんだろう。」

そんなとき、この恩師の教えが脳裏を強くよぎり、子供の頃、興味をもっていたクルマの構造への思いが再び沸き上がった。

「一八歳でクルマの免許をとった時に、再びクルマへの興味は沸いてきたね。確かに始めはクルマに乗れて嬉しいもんで暴走族まがいな乗り方をしていたときもあるけれど、そのときはレーサーになりたいなんて考えは少しもなかった。それよりも、クルマの構造の方を勉強して将来は整備士になろうと思っていましたから。」

彼は自動車整備短大へ進学した。まさに幼い頃のエピソードが予期していたかのように。だが、このときまでの彼は、将来レーサーになるうとは夢にも思っていなかったのである。

「僕は高校のポーター部のとき、頭を使えと常々いわれていたという。早くオールを漕ぎたかったら、体力よりも

頭を使え。人よりも一秒遅かったらそれを運と嘆く前に、どうしたらその一秒を縮められるか頭を使え。こういったポーター部のときに言われた言葉が、現在のレーサーとしての彼の冷静な判断をつくり出しているのである。

また、彼はこのポーター部でかけがえないものを学んでいる。「当たり前なことだけど、ポーターは水の上だから逃げ場がないですよ。逃げ場がないところで、同じポーター仲間と一緒にポーターって、自分一人がいくら焦ってオールを漕いでも前になかなか進まないですよ。前に早く進めばいい。仲間と息が合っていないと、仲間と息が合っていないと進められない。仲間とのチームワークがなければ勝てないんです。」

彼はレースの前に必ず、多をはじめ、メカニックともよくコミュニケーションをとる。これは自分一人でレースをしていない彼の自覚であり、カーレーサーもポーターと同じようにチームワークが勝利を生むという、彼の考えの表れである。よく一般には優れたレーサーの才能だけあれば、レースに勝てると思われがちだが、チームワークが一番勝敗を左右する。彼は既にそのことをポーターで学んでいたのである。

